

下田歌子『外の濱づと』論

——『枕草子』との関係——

久保 貴子

1

下田歌子は、「皇后の学校」とイメージづけられた「華族女学校」開校の準備段階から、その中心人物であった。日本の伝統的な有職故実に則った「宮中」も「国際化・西欧化」の一環として「改革」を余儀なくされ、その改革の下に下田も、近代的な女子教育の責を担わされることになったのである。前稿で述べたように、稿者はこの任命の一端は、その師である吉田松陰の考えに通底し、明治政府の中核にいた伊藤博文の考えにあったと考えている（「下田歌子の教育の源泉」、女性と文化³）。

明治天皇妃美子皇后の信頼は篤く、明治十八（一八八五）年十

一月の開校から三カ月に満たない明治十九（一八八六）年二月の行啓では、早くも下田の著した『和文教科書』が皇后により教科書として生徒に下賜されたほどであった。しかし、この女子教育の黎明期、明治二十一（一八八八）年という早い段階で、下田は関西地方へ出かけている（『四十九日の記』）。病氣療養の為の休養でもあったが、広く教育現場の視察の必要性を感じたからであろう。そしてこの旅で得た経験は、その後の下田の教育方針に多く影響を及ぼしたと考えられる¹。

加えて明治二十六（一八九三）年、下田が拜命したのは常宮・周宮両内親王の教育係であった。『内親王殿下御家庭教育に関し、常宮周宮殿下御教育主任、佐佐木高行殿よりの下問に対する鄙見』

には、下田の教育論が披瀝されている。皇族や名門の女子教育のみならず、欧州諸皇室の家庭教育、わが国女子一般の教育にも触れている。当時の華族女学校には、津田梅子・石井筆子など渡航経験者もあり、またキリスト教を母体とする多くの学校が設立される時期でもあった。その視察の必要性からも欧米各国への出張を願いだしたものと考えられる。

本稿は、下田の渡航時の随筆『外の濱づと』を中心に考察する。『枕草子』は皇后定子後宮に出仕した、ある意味教育係でもあった清少納言が記した作品であるが、『外の濱づと』は、この『枕草子』を模して記された随筆である。古来、自分自身の内情を吐露するのは、日記であり、随筆であり、和歌であった。幼少のころから下田はこれらを学び、自身も多くの作品を書き残しているが、本作品は海外での経験や、そこで得た感想や批評を『枕草子』の類聚的章段を模するという方法で書き残している。その点で独自性が高い作品といえよう。あわせて、その過程で下田が参看していた『枕草子』がいかなる本であったかという問題についても論究する所存である。

2

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばか

りさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずるなるをりも、ものあはれにすすみ、をかしきことも見すぎさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。

『紫式部日記』（新編日本古典文学全集・小学館）の三才女批評において、紫式部は清少納言を「したり顔にいみじうはべりける人」と語り起こし、右のように言つてのけた。才気走つた高慢ぶりを強調し、その才学も上辺だけの浅いものであるので、後にはきつと見劣りがし、ゆくゆくは悪くなるばかりである。まったく寂しくつまらないときでも、しみじみと感動しているようにふるまい、興あることも見逃さないようにしているうちに、浮薄な態度にもなるのだろうか、そういう浮薄なたちになつてしまつた人の行く末はどうしてよいことがあるのか、というのである。

こうした清少納言像は、紫式部の甚だ一方的な、そしておそろくは一つの個人的な見解によつて喧伝され、後世の人々を呪縛していった。『源氏物語』という、当時世界的に鑑みても長編の、まさに巨大な作品を世に遺した作者として名高い紫式部の発言に

よるところは大きい。「篤実温厚な紫式部と媽慢な清少納言」、『枕草子大辞典』「研究・評論史」の構図、それである。しかし、紫式部も清少納言も、ともに儒学者や歌人としてその名を刻んだ先祖に連なりながら、自身は受領階級に出自を持ち、女房として帝皇后（中宮）といった上流貴族に交わる生き方をした女性としては完全に共通するのである。

実践女子学園の学祖下田歌子もまた、岩村藩の武士階級、儒学者の家に生まれ、まるでそれが天命であるかのごとく天皇、皇后とその周辺の人々と交わる生き方をした。時を隔てるものの、先の清紫との共通点を、多く見出すことが出来る女性である。下田は明治時代に「当代の紫式部」と賞され、その『源氏物語』講義は、名講義として世に伝えられたほどであった⁴。またその講義の一部の成果は、『源氏物語講義』の著作として結実し、広く知られている。下田が考案したともいう女学生の袴には、「海老茶式部」の呼称さえもある。

こうした一般的な名声は、言うまでもなく、いずれも下田を紫式部に例えてのものである。おおむね帝・皇后（中宮）に出仕する学才に長けた女房像が当てはめられてのことだと想像できる。それでは、下田自身は紫式部にのみ傾倒していたと言えるのだろうか。例えば、三百年程時を下った鎌倉時代の兼好法師は『徒然草』の中で、

言ひつづぐれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、又今さらに言はじともあらず。おほしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

としている。兼好の時代、『源氏物語』と『枕草子』は右の通り並び賞されている。両作品にいいふるされていることであるが、同じことを、また事新しく言うまいと思っているものでもない。思っていることを言わないのは腹のふくれる気持ちのすることなので、筆にまかせて書くが、つまらない慰みごとであつて書く端から破つて捨てるはずのものだから、人が見るはずのものではない、と言うのである。「折節のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ」（第十九段）と季節の移りかわるさまの情趣深さに筆を走らせようとすれば、何をおいても『源氏物語』であり『枕草子』が絶対的な存在であつたことが窺い知れるのである。

先述したように、『外の濱づと』は下田が洋行した折に記した隨筆であり、『枕草子』を模した体裁の著作である（『香雪叢書』以下引用も同じ）。当時の外国に身を置き、その心情を記し留めようとした時に、下田が選びとつたのは『枕草子』の方法であつた。

このことはこの作品を考える上で重要な意味を持つだろう。次節から具体的に論じていきたい。

3

『外の濱づと』は、次の自序ともいうべき一文から起筆されている。

おのれ、外国に在りける頃、日本文学の事ども人の問ひ聞きたるに答へんとて、携へもて行きたる源氏物語、枕の草子やうの文ども、皮匣の中よりとりいで、片なりながら、ところ／＼釈し試みんとて、彼是えり出で見合はせなどする程ふと清原のおもとがをかしき筆づかひに心とまりて、ものせんとせし事はなかく／＼に打ち措かれつ。日頃眼に見耳に聞きて、あはれにも、面白うも、浅間しうも、侘しうも打ち思ひつる事どもを、筆の行くまゝに書き附けたるが、自らおもとが筆に習ひたるやうになりもて行きたる。鴨の真似する家鴨とかや、いとかたはら痛きわざなれば、其の儘に打ち籠め置きつるを、少しいと間ある程、其の折の日記、取りしたゝめ見んとて拾ひ出でたるを、友達の見附けて、いと珍らかなる旅の草子よ、などで斯うしみの住家にはなし果て給ふぞ、これ得させてんやとあるに、さはとて、大方散ぼひ皺つきたる

どもを取り集め綴り合せて、かくは書き改め試みたるなりけり。

これによると、そもそも渡航の折、日本文学の事を人から尋ねられた場合に答えるために、『源氏物語』『枕草子』などを携行していた。それをとるところ訳してみようとしていた折、ふと清少納言の筆づかひに心がひかれたものの、そのままになっていた。また、日頃見たり聞いたりして、さまざまに思うことなどを筆のおもむくままに書いたが、自然とまるで清少納言の真似になってしまったのでそのままにしておいた。しかし、少しの暇がある時に、その折の日記を取り出してみようとしていたのを、友達が見つけて、珍しい旅の枕の草子なのでこれを譲ってほしいという。そこで書き散らしていたものを集め書き改めたものだという。

もともとは海外に於いて、自国の文学について問われる場合の対応として、『源氏物語』や『枕草子』などを携帯しているのだが、これは翻訳することも想定していることであつたらしい。渡航に際してのおそらく荷物制限がある中で、下田が携帯したのがこれら文学作品であつたことは、そのアイデンティティを知るためにも改めて確認されてよいだろう。

一般的に『枕草子』は、随想的章段、日記的章段、類聚的章段の三分類に分けて論じられることが多い。下田は「あはれにも、面白うも、浅間しうも、侘しうも打ち思ひつる事どもを、筆

の行くまゝに書き附けた」と述べるが、それが『枕草子』の中でも、類聚的章段を雛型にして記し留められたのは、『外の濱づと』という作品を考える上でも重要な意味を持つはずだ。

さて、下田が渡航時に持参した『枕草子』はどのようなものであつたのだろうか。現在までの研究史においては、「三卷本（定家本）」、「能因本」、「前田家本」、「堺本」の四系統に分類して考えるのが一般的である。しかしながら、これら四系統には『源氏物語』の諸伝本間に指摘出来る小差に留まらず、著しい異同が認められている。ほぼ通説といわれるものに従えば、「もし三卷本を原作者の初稿本とすれば、能因本はその再稿本であり、堺本は後世の人の改作増補本、前田家本は能因本と堺本との合成本である。」（新編日本古典文学全集『枕草子』・小学館）ということになる。したがって、このような一筋縄ではいかない複雑な『枕草子』というテキストであるから、下田の手元に置かれ、活用していた『枕草子』はどういう本であつたのかを考える必要があるのではないか。節を改める。

4

以下に、『外の濱づと』の章立てに従つて各章段ごとの「三卷本」、「能因本」との比較を試みる。「能因本」は、それを基本的

な底本とする北村季吟『枕草子春曙抄』（二六七四年跋文）を用いる。近代まで最も流布し、読まれ続けた『枕草子』と言えば、『春曙抄』であつた。江戸時代中期の俳人と謝蕪村には、「春風のつまかへしたり春曙抄の一句がある。近時、島内裕子は『枕草子』は『春曙抄』と同義語だつた」として、この蕪村の句に「王朝文化の粹として『源氏物語』ではなく『春曙抄』を重ねた」と指摘している。続く明治時代においても『枕草子』の流布本は、この『春曙抄』の可能性が高いと考えられるからである（数字は、各章段の番号を示す。『春曙抄』を（ ）、『三卷（定家）本』を【 】に入れる。但し、『枕草子』の性質上、この章段の区切りは諸本に拠つて前後する可能性が高いため、あくまでも便宜上の目安として考えたい）¹⁰。

- ことくなるもの (同じことなれども・四) 【四】
- すさまじきもの (二二) 【二三】
- 人に侮らるゝもの (二四) 【二五】
- 憎きもの (二五) 【二六】
- 心ときめきするもの (二九) 【二七】
- 過ぎにし方恋しきもの (三〇) 【二八】
- 心ゆくもの (三一) 【二九】

- あてなるもの (四九) 【四〇】
- 似げなきもの (五二) 【四三】
- おぼつかなきもの (七二) 【六八】
- 比喩しへなきもの (七三) 【六九】
- ありがたきもの (七八) 【七二】
- あぢきなきもの (八二) 【七五】
- ◎いとほしげなきもの (八三) 【なし】
- 心地よげなるもの (八四) 【七六】
- ◎とりもてるもの (八五) 【なし】
- 物のあはれ知らせ顔なるもの (九一) 【八一】
- 愛たきもの (九三) 【八四】
- なまめかしきもの (九四) 【八五】
- 妬たきもの (二〇一) 【九一】
- かたはらいたきもの (二〇二) 【九二】
- あさましきもの (二〇三) 【九三】
- あはれなるもの (二二三) 【一五】
- 口惜しきもの (二〇四) 【九四】
- 遙かなるもの (二一二) 【一〇三】
- 常よりもことに聞ゆるもの (二一八) 【一一一】
- 絵にかきて劣るもの (一一九) 【一二二】

- かき増さりするもの (一一〇) 【一一三】
 - 心づきなきもの (一一五) 【一一七】
 - 侘しげに見ゆるもの (一二六) 【一一八】
 - 暑げなるもの (一二七) 【一一九】
 - 恥かしきもの (二二八) 【二二〇】
 - むとくなるもの (二二九) 【二二一】
 - はしたなきもの (二三一) 【二二三】
 - 徒然なるもの (二四二) 【二二三】
 - 徒然慰むるもの (二四三) 【二三四】
 - 取り所なきもの (二四四) 【二三五】
 - なほ世に愛たきもの (二四五) 【二三六】
- (なほ愛たきもの・二四五) 【二三六】
- 怖ろしきもの (二五〇) 【二四一】
- (怖ろしげなるもの・二五〇) 【二四一】
- 清しと見ゆるもの (二五一) 【二四二】
 - ◎穢なげなるもの (二五二) 【なし】
 - 賤しげなるもの (二五三) 【一四三】
 - 胸つぶるゝもの (二五四) 【二四四】
 - うつくしきもの (二五五) 【二四五】
 - 人ばえするもの (二五六) 【二四六】
 - 名怖ろしきもの (二五七) 【二四七】

○見るに異なることなき物の文字に書いてことくしきもの

(二五八) 【一四八】

○むつかしきもの

(むつかしげなるもの・二五九) 【二四九】

○えせものゝ所得るをりのこと(二六〇) 【二五〇】

○苦しげなるもの (二六一) 【二五一】

○羨ましきもの

(羨ましげなるもの・二六二) 【二五二】

○速くゆかしきもの

(疾くゆかしきもの・二六三) 【二五三】

○心もとなきもの

(二六四) 【二五四】

○昔覚えて不用なるもの

(二六七) 【二五七】

○頼もしげなきもの

(二六八) 【二五八】

○近くて遠きもの

(二七〇) 【二六〇】

○遠くて近きもの

(二七二) 【二六一】

○したり顔なるもの

(二八三) 【二七八】

○こゝろにくきもの

(二八七) 【二九〇】

○大きにてよきもの

(二〇九) 【二二七】

○短かくてありぬべきもの

(二一〇) 【二二八】

○人の家に似合しきもの

(二一一) 【二二九】

○騒がしきもの

(二三二) 【二三八】

○ないがしろなるもの

(二三二) 【三三九】

○詞なめげなるもの

(二三三) 【三四〇】

○伶俐きもの

(二三四) 【三四一】

○身を代へたらん人は斯くやあらんと見ゆるもの

(二四〇) 【三二九】

○たゞ過ぎに過ぐるもの

(二四三) 【三四二】

○ことに人に知られぬもの

(二四四) 【三四三】

○いみじく穢げなるもの

(いみじく穢きもの・二四九) 【三四五】

○せめて怖ろしきもの

(二五〇) 【三四六】

○頼もしきもの

(二五一) 【三四七】

○嬉しきもの

(二五八) 【三五八】

○たふときもの

(たふときこと・二六一) 【三六一】

◎悪きもの

(二六六) 【なし】

○きらくしきもの

(二七八) 【二七六】

○見習ひするもの

(二八九) 【二八五】

○打ち解くまじきもの

(二九〇) 【二八六】

○心づきなきもの

(三一〇) 【二八七】

○云ひ憎きもの

(三一四) 【二九〇】

○見苦しきもの

(三二四) 【二九五】

右で確認した結果、『外の濱づと』の章立ては、三巻本系統にはない章段を有していること（◎印で示す）、章立ての順番もほぼ『春曙抄』に従っていることから、『春曙抄』に拠っていることは明らかであろう。さらに、その順も入れ替えることなく、ほぼ『春曙抄』に擬える形で、『枕草子』の類聚的章段に従うものである。しかし、いわゆる「ものはづくし」のうちの「：は」には抛らない特徴が顕著に見られる。固有名詞列挙になりがちな「：は」に比べて、「：もの」のほうが下田の批評眼や思念が述べやすく、読者の興味も惹きやすかつたものと考えられる。

ところで『源氏物語』に比べ、『枕草子』は長い間注釈の対象とはなり得てこなかった歴史がある。『春曙抄』は、漸く出現した本格的な注釈書であった。もしも、下田の手元に三巻本系統の『枕草子』があったとしても、外国へ持参するのならば、この『春曙抄』であつたらう。折々、注を反芻しながら原本を読み解くために、下田は遠き異郷で『春曙抄』をひもといたのである。

5

『外の濱づと』が、『枕草子』の類聚的章段に基づいて書かれたこと、そしてその元となつたのは『春曙抄』であることを確かめたが、さらにこの作品に『枕草子』を重ねた意義について述べて

いきたい。

下田は序において『外の濱づと』が公刊された事情について、友人の勧めに拠るものだと述べているが、さらにこの友人の勧めの発端になつたのが、洋行中に書き溜めた草稿が友人の眼に偶然に触れたことに拠ると書いていることにも注意を要する。

少しの間ある程、其の折の日記、取りしたゝめ見んとて拾ひ出でたるを、友達の見附けて、¹¹

つまり、この書き方からは、この草稿を自分から進んで友人に見せたわけではなく、むしろ推敲作業中にたまたま友人の眼に触れたかのように見えるのであり、それを目にした友人がこの原稿を求めたことが、かかる草稿を成稿して出版に至つたいきざつたというのである。

このような展開は『枕草子』の跋文に記された、『枕草子』の流布の状況と重なる部分があるように思われる。現在もつとも広く読まれている『枕草子』の三巻本本文には次のようにある。

左中将まだ伊勢守と聞えし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でしものは、この草子載りて出でにけり。

まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり、とぞほんに。¹²

ここで言う左中将とは、源経房を指す（長徳四・九九八年 左中将、長和四・一〇一五年 権中納言。長徳元年正月から二年末まで伊勢権守）。経房は、清少納言と親しい人物であった。実家にくだつていた清少納言の許を訪れた経房に出された畳（今でいう座布団のようなもの）に、清少納言が書き溜めていた『枕草子』が載っていたというのである。

なお、このエピソードは、下田が洋行時に携行していたとおぼしい『春曙抄』の巻末にもほぼ同じ形で載せられている。

左中将まだいせのかミときこえし時、里におハしたりしに、はしのかたなりけるたゝみさし出し物ハ、このさうしのでりて出にけり。まどひとりいれしかど、やがてもておはして、いと久しく有てぞかへりたりし。それよりありきそめたる也とぞとあり。¹³

その畳に載つた『枕草子』を経房は持ち帰り、随分経つてから戻してくれた。それから、経房を起点とする形で、『枕草子』は

広まったのである。

このいきさつは、いささか出来過ぎのような感がある。畳に『枕草子』がたまたま載つて経房の前に出ていくというのも、清少納言に仕える下仕えの手違いと考えられなくはないが、むしろ、清少納言が故意に、経房の眼に触れさせたのではないかと考える見方も有力である。清少納言の同時代の読者達は、そのような虚実の呼吸をよくわかつていたのではないだろうか。

下田が『外の濱づと』を公刊するにあたり、友人との関わり、すなわち友人の眼に触れたことを記したのは、このような『枕草子』の流布の状況を意識した営為であったと考えられる。友人が草稿をたまたま目にしたような書き方、さらにこれを埋もれさせるのは惜しいと「これ得させてんや」と持ち帰ろうとしたこと、もちろん友人は経房とは違い、持ち帰らなかつたわけだが、間接的に流布に関わっているところに、『枕草子』の流布と相似形をなしていると言えるであろう。

『外の濱づと』はその内容も『枕草子』類聚的章段を踏まえたものであるが、その流布の状況も『枕草子』の在り方を十二分に意識したものであった。まさに『枕草子』を深く読み込み、自家薬籠中のものに行っていることがわかる。あるいはここでいう友人も下田の創作した虚構の人物であり、『枕草子』と重ねるための下田の文学的な遊びであつたのかもしれない。

なお、『外の濱づと』の終わりにも跋文が置かれており、そこにも「はし書きに言へるが如く、こはもと、枕の草子に連らねたりし詞を」とあり、『枕草子』との関係が再度強調されていた。

ところで、なぜ下田は海外渡航体験を『枕草子』に重ねつつ記したのであろうか。その問題について考えてみたい。

『外の濱づと』が『枕草子』の類聚的章段と重ねられていることは明らかだが、それは単に下田が『枕草子』に親しんでいた、そのあらわれというだけにはとどまらないだろう。序というべき部分で、「清原のおもとがをかしき筆づかひに心とまりて」と述べていたことに注意したい。ここでの「清原のおもと」は他ならぬ清少納言を指すわけであるが、同僚の女房を呼ぶときの尊称「おもと」が使われていた。「清少納言」や「清女」といった呼称ではなく、「清原のおもと」と呼んでいるところに、親しみのあらわれとともに、同じ女房としての視線が感じられるところであろう。こうした呼称を通して、下田自身が宮仕え女房であったという前歴が浮かび上がってくるのである。そのことに下田は、自覚的であったと思われる。

それは、次のことをも浮上させるであろう。すなわち下田は海外に渡り、かの地でさまざまな見聞を広げたわけであるが、下田の眼と心は宮仕え女房としてのそれであったということである。そもそも、この作品に記された「ものはづくし」は、蘇生した『枕

草子』という趣を持つが（そこに戯作性をみることももちろんできる）、海外の人物や事象に対して厳しく批判的な物言いが少なからず存在している。

「憎きもの」

○ 年若き女の、着るものも穢なげならぬが、道すがら物食ひもて行く。

「かたはらいたきもの」

○ まほにもあらぬ貌を、いみじう磨き繕ひて、玉の飾りこちたぎ迄したる。

○ 頭の髮斑に白う成りたる老女の、若き男に引き助けられて、氷滑といふものを学びたる。時々あゝと打ち領きて、腰打ちのべなどして居たるよ。

「怖ろしきもの」

○ 西洋人の心の中。早晚、東洋諸州は我が掌の中に握りてんと、下に希ひ思ふ事は斯う斯うぞなど、人の言ふを聞くこそ、最と怖ろしけれ。さるは、面てを和らげ、詞を巧みにして、最と能う交際ふ人々も、却りて気怖ろしうぞ思ひなざるゝや。

「賤しげなるもの」

○ 酔ひしれたる人。さるわざ、いみじう悪き事にすめる習慣の国なればいとゞ目とまりて、賤しげにぞ見なさるゝや。

こうした表現は枚挙にいとまがない。それに比例するように、母国を誇らしげに記し、また海外で母国が賞賛されていることの言及も多い。

「心ゆくもの」

○ 日本の婦人服、外国人に褒め称へられたる。さるは追従にもやとは思ふものから、なほ心行きて覚ゆるこそをかしけれ。

「なほ世に愛たきもの」

○ 我が日本の歴史。斯許り小さき島国の古物語り、何の取り所かあらんと、今様の人は云ふめり。されど、代々の天皇の、いみじう民を撫で慈しみ給ひ、国民将たいと真実に靡き事うまつりつる事ども、外国人に語り聞かせたれば、最といたう愛で感げて、世界の中に斯る国体やまたとあるべきなど、外国人ぞ却りて云ふめる。それ、よし追従なる

ことの交りたるにもせよ、なほ世に愛たきもの、中にこそ、取り立て、教へつべきものなれ。

それにしても外国人からの日本への賞賛に、どちらの文でも「追従も混じつてもいようが」と述べているのがほほえましい。

このような言説の基盤となったのが「ものはづくし」という方法であり、それが日本の女性作者の古典文学に取材したものであるゆえに、また伝統的な日本人、とりわけそのような伝統的な価値観に関わる宮仕え経験者という共通性を持つ者の言説であるゆえに、そこで記されたことばは固有の説得力を持つことになったであろう。

清少納言の好悪を奔放に記したように見える『枕草子』の文体を援用することで、下田は自己の主観的な批評のことばを書き連ねることが可能になったように思われる。角度を変えていえば、そうした下田の立ち位置は清少納言と同じ宮仕え女房であったという来歴に支えられ、その言説の正当性をおのずから保証することになる。今紫式部ならぬ、今清少納言たる、日本の伝統的な教養下にある下田歌子が西洋と涉り合った貴重な記録として、『外の濱づと』という作品は現前することになった。

海外経験を「ものはづくし」で記すというのは、もちろん戯作的な姿勢ではあるが、それだけでは解消されない、存外に考え抜

かれた、下田以外の余人にはなしえなかつた表現方法である。そのねらいは当時の時代相の中で見事に成功していたというべきであらう。

本稿は『外の濱づと』を主として『枕草子』との関連から論じた。そこに記された日本と西洋との関係、思想性、批評性、さらには当時この作品がどのように受け止められたかなど、考察すべきことはまだまだ多く残されている。後稿を期す次第である。

■注

- 1 「下田歌子の教育の源泉」(下田歌子研究所年報「女性と文化第3号」平成二十九年三月)。
- 2 『下田歌子先生傳』(故下田校長先生傳記編纂所、昭和十八年十月)。
- 3 枕草子研究会編、勉誠出版、平成十三年四月。
- 4 注2に同じ。
- 5 『源氏物語講義 首巻』(実践女学校出版部、昭和九年四月)。
- 6 注1に同じ。
- 7 『方丈記 徒然草 正法眼藏隨聞記 歎異抄』(新編日本古典文学全集、小学館、平成七年三月)。

8 下田歌子著作集『香雪叢書 第一卷』(実践女学校出版部、昭和七年十一月)。なお、随時旧字などを、私に改めた箇所がある。

9 『枕草子 上・下』(筑摩書房、平成二十九年四月)。

10 『春曙抄』の引用は、注9に同じ。「三卷(定家)本」の引用は、『枕草子』(新編日本古典文学全集、小学館、平成九年三月)に拠る。

11 注8に同じ。

12 注10に同じ。

13 『枕草子春曙抄』「延宝二年甲寅七月十七日 北村季吟書」奥書本。

14 跋文は以下のとおり。「わが彼の国に在りける程、見もし聞きもしつる事に就きて、難波津のよしともあしとも、心ひとつに思ひしみぬるは、なほこの外にも最と繁けれど、はし書きに言へるが如く、こはもと、枕の草子に連らねたりし詞をさながら、旧りぬる跡を、新らしう改め試みんとて、戯れに旅寝の窓のつれづれなる折々、刈り束ね書いつけて、望郷病の薬にもとものしつるなれば、いとゞしどけ無き鳥の跡、引きこめてもありぬべきも交り、はた書きも置かまほしきを省きたるも多かめれど、余りの落葉は、またもさるべき序あらん時に、更に取り集め綴りなしてんとて、最と中空のやうなれど、今はたゞ斯ばかりをなん。」

「ここでも『枕草子』との関係を述べている。なお、この跋

文の「見もし聞きもしつる事に就きて、難波津のよしともあしとも、心ひとつに思ひしみぬるは」という一節は『枕草子』跋文の「この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて」（三巻本、『春曙抄』もほぼ同じ）「されど、この草子は、目に見え心に思ふ事の、よしなくあやしきも」（能因本）¹⁵などを想起させ、更に「旅寝の窓のつれづれなる折々、刈り束ね書いつけて」は「つれづれなる里居のほどに、書きあつめたるを」（三巻本、『春曙抄』も同じ）「つれづれなるをりに、人やは見むとするに思ひて書きあつめたるを」（能因本）¹⁶などと重なっているであろう。『外の濱づと』が『枕草子』と自らの創作状況を重ねながら記していたことがここからも裏付けられるだろう。

日本古典文学全集、小学館、昭和五十八年二月。

16 15

注15に同じ。

（くぼ・たかこ／実践女子大学下田歌子研究所研究員）